

第 13 期岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議

議論の整理（案）

～全ての人のウェルビーイングの実現に向けた公民館の取組～

令和 7 年〇月

岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議

はじめに ～ウェルビーイングの実現に向けて～

- 本第13期岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議は、以下に述べるような国の施策の方向性に対応する公民館の在り方を検討し、推進方策を提示するための議論を行った。
- 令和5年6月に閣議決定された国の「教育振興基本計画」では、コンセプトとして「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を掲げている。
- ウェルビーイングは、「教育振興基本計画」の中で、「身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むものである。また、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念である」と定義されている。
- 令和4年8月にまとめられた「第11期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理 ～全ての人のウェルビーイングを実現する、共に学び支えあう生涯学習・社会教育に向けて～」の中で指摘されているように、生涯学習を通じた個人の成長と、持続的な地域コミュニティを支える社会教育は、ウェルビーイングの実現に密接不可分なものである。
- 全ての人のウェルビーイングを実現するためには、障がい者や外国人、子ども・若者、孤独・孤立の状態にある者、高齢者など、誰一人として取り残すことなく、全ての人に、生涯学習・社会教育の学習機会を提供していく必要がある。
- さらに、前述の「議論の整理」の中では、全ての人のウェルビーイングを実現するためには、公民館を子供の居場所として活用することや、公民館における住民相互の学び合い・交流の促進、公民館と各地方公共団体における関連施設・施策や民間企業等との連携を進めることなど、公民館等の社会教育施設の機能強化を図ることが重要であることが指摘されている。
- そこで、第13期岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議においては、以下のような論点について検討し、「全ての人のウェルビーイングの実現に向けた公民館の取組」を明らかにするとともに、推進方策をまとめた。

1. 全ての人のウェルビーイングを実現するための施設として、公民館はどのような環境を備えることが望ましいか。
 - ・障がい者や外国人、子ども・若者等全てのの人に生涯学習・社会教育の学習機会を提供していくために必要な環境や連携、体制づくり

2. 全ての人のウェルビーイングを実現するために、公民館が取組を行う際に意識すべきポイントは何か。

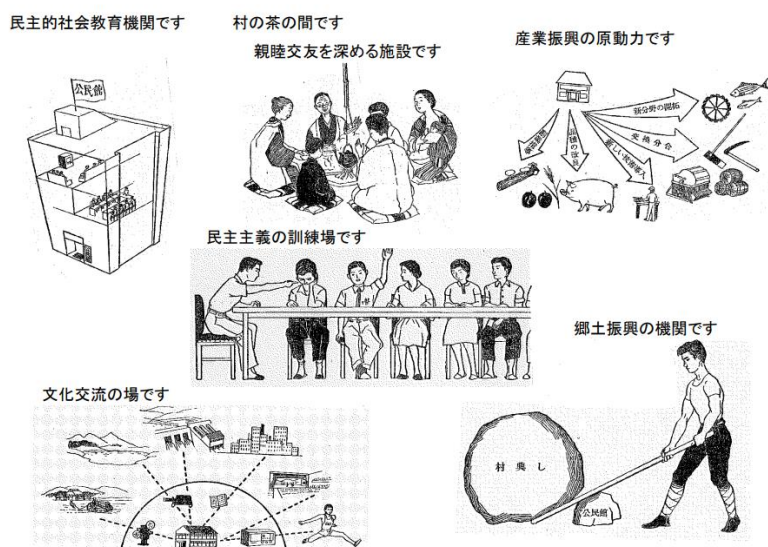
- ・障がい者や外国人、子ども・若者等全ての人に生涯学習・社会教育の学習機会を提供していくためのポイント
- ・「個」が学びによる幸せを感じるとともに、その成果が地域における活動に還元されるためのポイント

○ 上記の論点を検討する際には、以下のことに注意して進めた。

- ・地域の実情は市町村ごとに大きく異なるため、人口規模等が異なる公民館の事例を扱う必要があること
- ・ウェルビーイングの実現は、公民館だけでなく、社会全体で取り組むべきものであるため、公民館からの視点だけでなく、市町村教育委員会等の行政からの視点など、多様な視点から検討すること

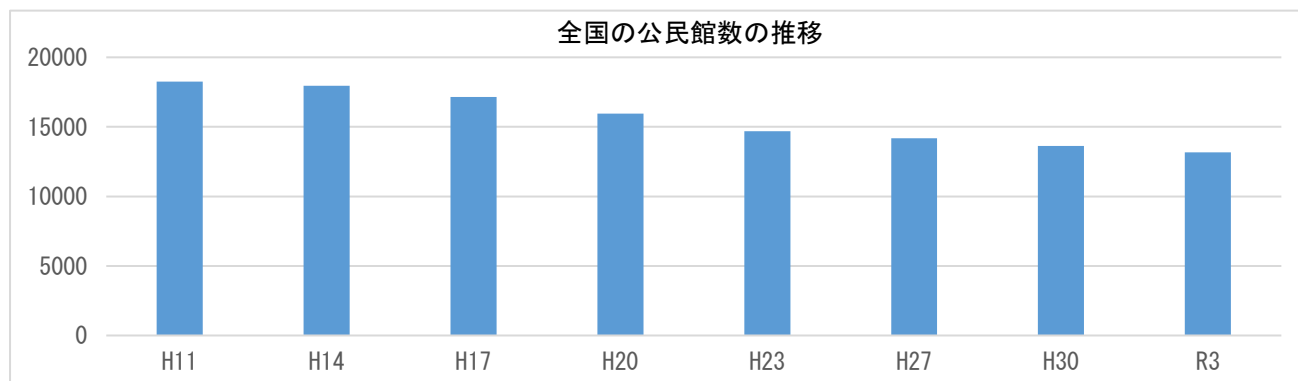
1 岡山県の公民館をめぐる現状・課題

- 公民館は、我が国固有の地域における総合的な社会教育施設で、現在は、住民の生活課題、地域課題の解決等に寄与することを目的として、一部の都市を除き全国に設置されている。
- 公民館の目的は、「公民館は、市町村その他一定区域内の住民のために、実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もって住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的とする」（第20条）とされており、これまで公民館は、住民同士が「つどう」「まなぶ」こと、地域住民同士を「むすぶ」ことで、個人の学びを促進するだけでなく、地域住民間のつながりを促進し、生涯学習・社会教育の中心的施設として、地域住民のウェルビーイングの実現に貢献してきた。



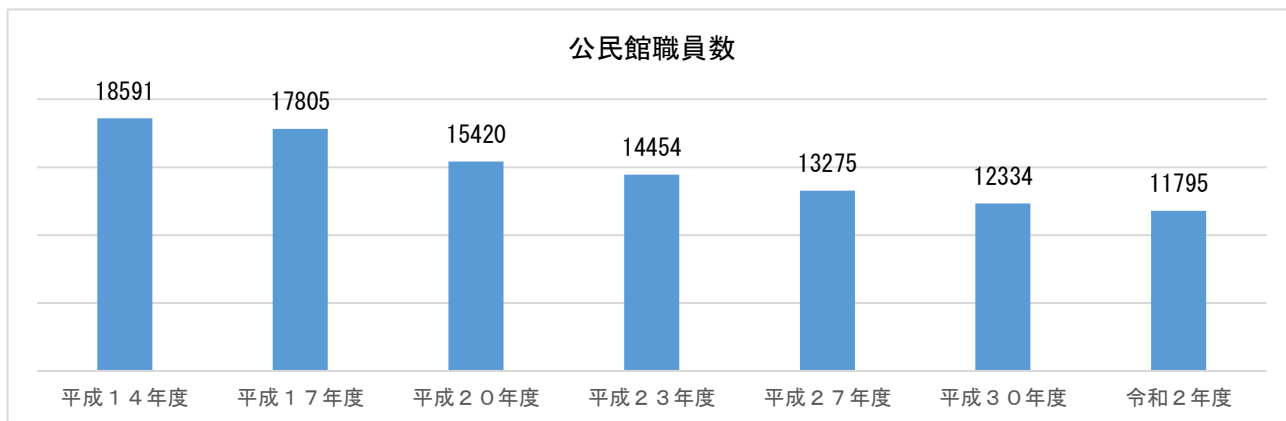
▲寺中作雄著『公民館の建設－新しい町村の文化施設』より

- 近年、全国的には、公民館数は年々減少し、令和3年度には、全国で約 13,200 館となっているが、地域の防災拠点としての役割や地域運営組織の活動基盤となる役割など、公民館が求められる役割は増加している現状がある。



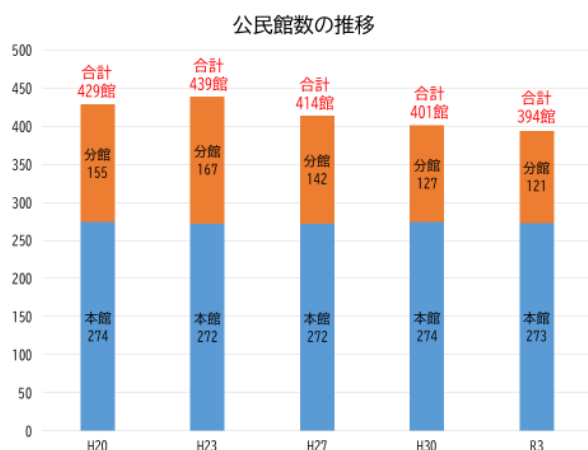
(出典：社会教育調査)

- 一方で、職員数の減少や主催事業の減少が見られるなど、厳しい状況に置かれている公民館も多く存在している。

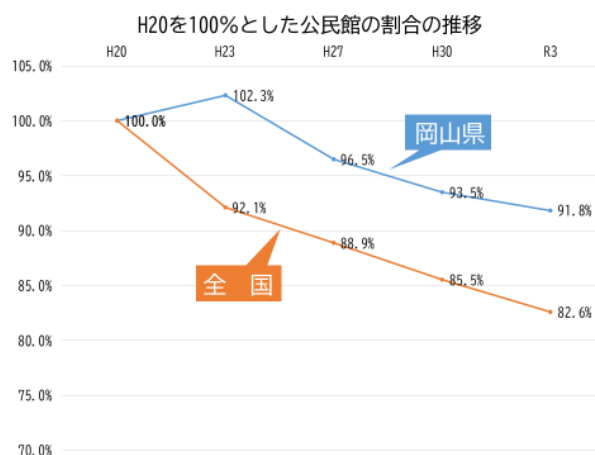


(出典：社会教育調査)

- 岡山県内でも全国と同様に、公民館数の減少や職員数の減少が見られるが、減少の割合は全国の割合に比べると緩やかではある。



(出典：社会教育調査)



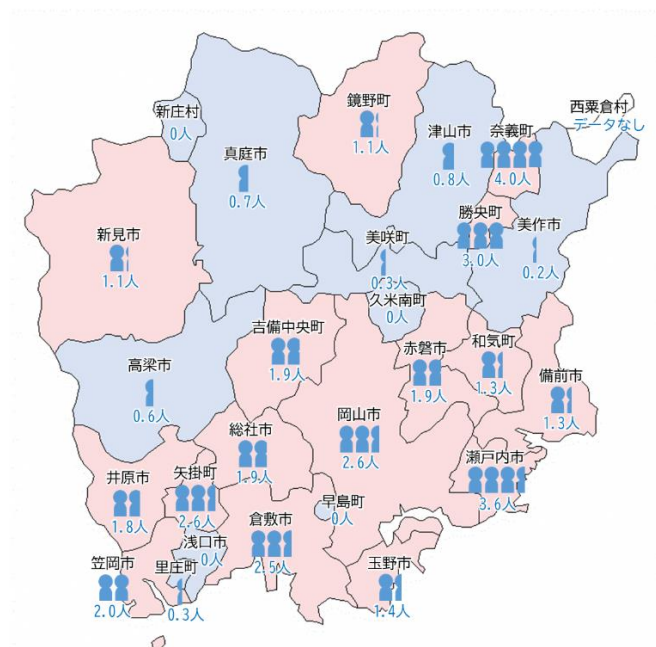
(社会教育調査より作成)

- しかし、公民館数が大きく減少したり、1公民館あたりの専任の職員数が1人を下回ったりしている市町村も存在するなど、県内でも大きな差が見られている。
- 公民館の対象別学級・講座数としては、成人一般対象のものが多く、青少年対象の事業が少ない状況にある。また、障害をもった方を対象とした事業を行っている公民館の割合は約8%※¹と少ない。全ての人のウェルビーイングを実現していくためには、子ども・若者に対する取組や障害をもった方への取組を進めていく必要がある。
- 公民館活動へ子ども・若者や障害をもった方など、全ての人の参加を促進することで、地域住民のウェルビーイングの実現につながるだけでなく、公民館の地域コミュニティの拠点としての機能を強化することにつながり、公民館活動の活性化にもつながる。

※1・・・令和5年度公民館実態調査（岡山県公民館連合会が実施）による。障害をもった方を対象とした事業を行っていると回答した公民館数は271館中21館であった。

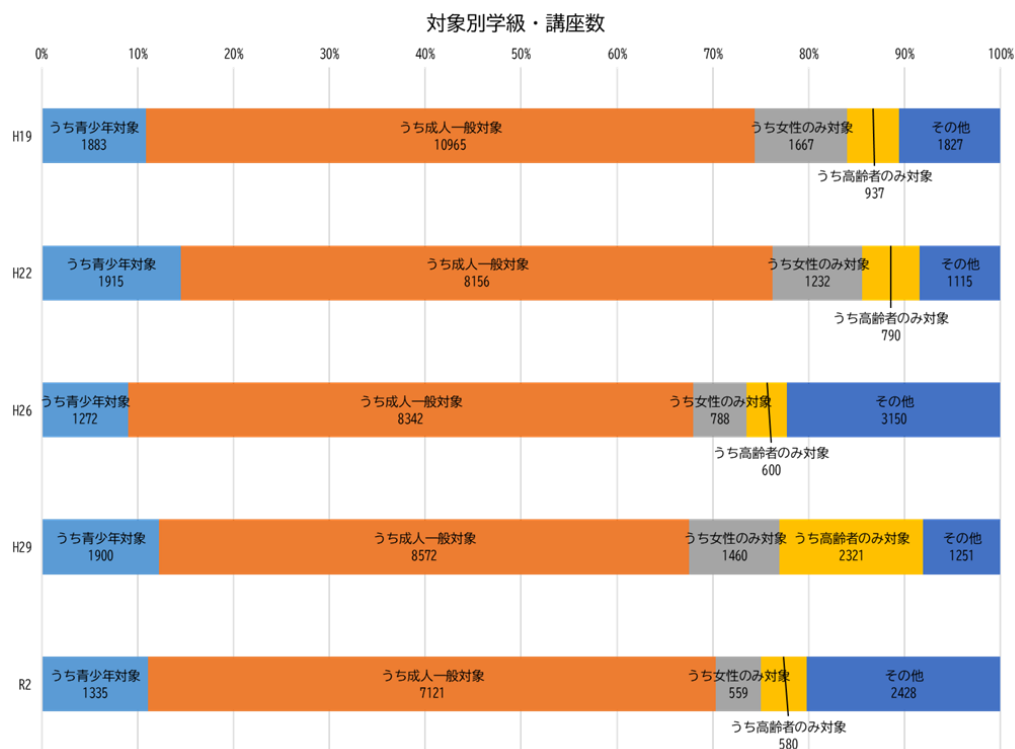
- 岡山県内の公民館の数は減少しており、また、職員配置も苦しい状況にあり、公民館だけでなく、全ての人のウェルビーイングを実現するためには、NPOや民間等と連携し、公民館を中心としたネットワークを構築していく必要がある。

市町村別 1館あたりの平均専任職員数（R5年5月1日現在）



※背景が青色の市町村は、専任職員数が1人を切っている市町村。背景が赤色の市町村は、専任職員数が1人を超えている市町村。

※岡山県教育庁生涯学習課「生涯学習・社会教育行政便覧」より作成



（出典：社会教育調査）

2 全ての人のウェルビーイングを実現する公民館の取組

1) 全ての人のウェルビーイングを実現するための施設として必要な公民館の環境や連携・体制づくりについて

①多様な機関や団体とのネットワークづくり

- 子どもや若者、障害者、外国人等全ての人に公民館の学びを届けるためには、多様な機関や団体とのネットワークを作ることが大切となる。
- 子どもや若者に公民館の学びを届けるためには、大学、小学校、中学校、高等学校などとの連携が効果的であり、障害者に公民館の学びを届けるためには、特別支援学校や福祉事業所、社会福祉協議会、NPOなどとの連携が効果的である。外国人に公民館の学びを届けるためには、地域内の企業との連携が効果的である。学校との連携の際には、コミュニティ・スクール^{※2}等の仕組みを活用することも効果的である。
- また、これらの多様な機関・団体とのネットワークを作るとは、より多様な学びを提供していくことや、学びの充実にもつながる。
- 社会教育施設や民間施設など多様な機関や団体と連携を進めることは、地域全体の生涯学習・社会教育の推進にもつながる。
- 多様な機関や団体とのネットワークをつくるためには、日常から関係性を構築しておくことが重要である。緩やかな関係性を築き、一緒に価値をつくっていくことがポイントとなる。
また、解決したい地域の課題や実現したい地域像などを示すことで、同じ課題意識をもつ機関や団体の連携が得られやすくなる。

②多様な人が利用しやすい環境づくり

- 公民館が、子ども・若者、障がい者、外国人等全ての人のウェルビーイングを実現するためには、施設のユニバーサルデザイン化や、ICT環境の整備、合理的配慮の提供など、全ての人が利用しやすい環境づくりを進めることが大切である。

※2・・・学校運営協議会を設置した学校のこと。コミュニティ・スクールでは、学校運営に地域の声を積極的に生かし、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めていくことができる。

- 公民館の取組や公民館の備えている機能について、WEBサイト等で情報発信を行うことも多様な人が利用しやすい環境づくりにつながる。また、オンライン等の活用した学びを行うことも多様な人が利用しやすい環境づくりへとつながる。
- 幼少期から公民館を利用したり、保護者にとって行きやすい場所としたり、外国人が日常生活に関する相談ができる場所としたりして、公民館身近に感じてもらうことで、その後の利用にもつながる。自習スペースの設置など、公民館に関わってもらう機会を意図的に作ることも、公民館を身近に感じてもらうことにつながる。
- 心理的に利用しやすい環境をつくることも重要となる。そのためには、公民館職員や地域住民が、偏見や思い込みを持たないこと大切である。多様な人について知ったり、同じ空間で同じ体験や学びを共有したり、教えられる側が教える側に回ったりすることは、偏見や思い込みの解消につながる。
- 多様な人が利用しやすい環境をつくるためには、子ども・若者や障害者、外国人等の多様な人の意見を聞いたり、意思決定の場に多様な人が参画したりすることが効果的である。

2) 全ての人のウェルビーイングを実現するために、公民館が取組を行う際に意識すべきポイント

①多様な人々の存在に目を向ける

- 全ての人のウェルビーイングを実現するためには、障がい者や外国人、子ども・若者等多様な人々の存在に目を向けることが重要である。公民館が多様な人々の参加を想定していなければ、参加者側も公民館での学びが視野に入らなくなる。そうすると、障がい者や外国人、子ども・若者等は、ますます公民館の学びに参加せず、公民館側も多様な人々が参加しないことが「当たり前」となる可能性がある。
まずは、多様な人々の存在に目を向け、できるところから取組を始めることが大切である。
- 多様な人々の参加が十分ではない場合は、広報等の際に、「子どもも対象」「外国人も対象」などのように、あえて対象を表記することで、参加のきっかけとすることができる。様々な段階で、多様な人々を対象としていくことが大切である。

②個人の要望や社会の要請に応えた取組を行う

- 公民館は、「学習したい活動」と「学習すべき活動」の両方を行う施設であり、全ての人のウェルビーイングの実現のためには、「学習したい活動」のみならず、環境問題や人権、男女共同参画、防災などの「学習すべき活動」にも焦点をあてていく必要がある。
- 個人のスキルアップにつながる活動や、個人の楽しみにつながる活動などの「学習したい活動」を行うことで、生涯学習・社会教育への間口を広げることができる。
- 一方で、社会から要請され、多くの人が「学習すべき活動」もある。個人の要望と社会の要請のバランスを取りながら、うまく「学習すべき活動」に焦点を当てていく必要がある。その際には、料理やスポーツなど、例えば多くの人が興味を持ちやすい活動から入り、徐々に内容を深めていくような手法が効果的である。
- 学習者や社会のニーズをしっかりと把握することが必要となる。

③参加ではなく参画してもらう

- 小学生は、地域と繋がりやすく、高校生も総合的な探究の時間等で地域について学習する機会も増えているが、中学生や大学生は地域と関わる機会が少ない状況がある。地元の中学校と連携して、中学生にボランティアとして計画段階から活動に参加してもらったり、大学生のインターンシップを積極的に受入れ、大学生による企画数を増やしたりすることで、社会教育活動への参加窓口を広げることができる。また、障害者においても学びの提供側となることで、より主体的に関わるきっかけとなる。ターゲットを明確にして取組みを進めることや、参加してもらうだけでなく、参画してもらう視点が必要である。
- 参画し主体的に関わったり、役割を与えられることで、公民館がその人の居場所となったり、生きがいや喜びを感じることができたりする。それはウェルビーイングの実現に密接に結びついている。

④公民館職員はアシストに徹し、役割を分担する

- 全ての人のウェルビーイングを実現させるためには、公民館に来館してもらうことそのものを目的とするのではなく、公民館で学び、繋がりを広げた者が地域で活動し、公民館という場所に限らず、生涯学習・社会教育活動が行われることが理想であり、取組が終わった後も、その効果が持続・波及していくようにすることが必要である。

そのためには、公民館職員が中心的な役割を果たすのではなく、住民の自立的活動に向けて公民館職員はアシストに徹することが重要である。その際には、既存行事と合同開催する等、地域の方の過度な負担とならないよう工夫することも必要である。

- これからは公民館職員の意識を変え、内部職員で完結するのではなく、外部の機関等と連携し、役割を分担しながら活動を広げていく必要がある。公民館が先導はしつつ、公民館以外の場所でも生涯学習・社会教育活動が行われるようにしていくことが重要である。
- 外部の機関等と連携し、役割を分担することで、公民館が行うもの、外部の機関等が行うものを明確にすることができ、公民館が行うべきものに集中的に取り組むことができるようになる。
- 全ての人のウェルビーイングを実現するためには、いろいろな立場や世代のつながりを創ることが重要である。公民館が拠点となり、地域住民同士のつながりを創ることで、地域全体のウェルビーイングの実現にもつながる。

3 全ての人のウェルビーイングの実現ために、今後求められる方策

1) 公民館を管轄する市町村教委等に求められる方策

①多様な人々が利用しやすい環境づくり

- 全ての人のウェルビーイングの実現のためには、障がい者や外国人、子ども・若者等、多様な人々が公民館を利用しやすい環境を整えていく必要がある。それぞれの人がもつ文化や特性により、色の見え方、サインも異なっているため、色や宗教にかかわらず使える表示や、他言語表記等の環境整備を進めていくことが大切である。

②目指す方向性や取組テーマ等を設定し、市町村全体で取り組む

- 公民館を管轄する市町村教育委員会等が、目指す方向性や取組テーマ等を設定し共有することで、一部の公民館の取組でなく、公民館全体の取組を高めることができる。

③各関係機関や学校、NPO、企業等との連携を進める

- 今後、全ての人のウェルビーイングを実現する公民館となるためには、各関係機関や学校、NPO、企業等との連携が必要不可欠であるため、公民館を統括する市町村教育委員会等は、各関係機関や学校、NPO、企業等への働きかけを行っていくことが必要である。
- 各関係機関や学校、NPO、企業等とネットワークを作り、それぞれの取組内容等を共有し、連携・協働していく部分を確認したり、取組が重なっている部分は役割分担を進めたりすることが必要である。
- 企業等が公民館活動に参画しやすくするためには、社会教育法第23条第1項第1号の趣旨（公民館が営利事業に関わることを全面的に禁止するものではないこと）を周知し、可能な活動等について整理することも大切である。

④研修体制の構築や職員の配置、ボランティアの募集等の支援を進める

- 公民館の取組を充実させるためには、館長等への研修体制の構築や、職員の配置を進めていく必要がある。
- ボランティアの募集等を行い、公民館に関わる人を増やすことも有効である。

2) 公民館に求められる方策

①周辺機関や団体、企業等とのつながりづくりを進める

- 全ての人のウェルビーイングの実現のためには、地域にある周辺機関や団体、企業のリサーチを進め、それらの団体との連携を進めることが効果的である。障がい者や外国人、子ども・若者等に関係する周辺機関や団体、企業等と連携することで、効果的な広報等や新しい企画も可能となる。
- 連携を進めるには、複数の団体が交流する場を活用するなどして、まずは顔なじみになるところから始めることが有効である。
- また、公民館利用団体同士の交流を活性化し、つながりづくりを行うことも重要となる。公民館利用団体のお互いの交流により、新しい企画・連携が生まれることもある。

②きっかけづくり（入口支援）を重点的に行う

- 障がい者や外国人、子ども・若者等全ての人に生涯学習・社会教育の機会を提供するために、まずは公民館に来てもらうきっかけづくり（入口支援）を重点的に進めることが大切である。
- きっかけづくりの方法としては、様々な方法が考えられる。例えば、入りやすく使いやすい雰囲気づくりをしたり、自由に使え、気軽に入ることができる場所を設置したりすること、学校や企業と連携し、職場体験等で公民館を活用してもらったり、出前授業を行ったりすることなどがある。困り事相談や悩み相談等をきっかけに公民館に足を運んでもらい、多様な講座の存在を知ってもらうことへつながることも考えられる。
- 土日・祝日や夜間等、働く人が参加しやすい時間に講座等を行うこともきっかけづくりとして重要である。

- ボランティアとして公民館に関わってもらうことも入口支援として有効な方法である。「公民館サポーター」として、協力いただける方を年齢問わず募集をし、公民館活動の運営に携わってもらったり、講座や企画を公募したりすることも有効である。
- 主体となるボランティア等の自立を支援・育成することで、ボランティアを中心に主体的な住民の活動が行われるようになる。特に「学習したい活動」は、自主的な学びが発生するように仕組みづくりをしていくことが大切である。公民館はボランティアのサポート、育成が大切となる。
- 入口支援では、ニーズを整理し、参加者が「行きたい」「楽しそう」と思える企画を考えることが大切である。また、「誰かに誘われたから行く」ということもきっかけとなり得る。そのためには広報の仕方を工夫し、まずは多くの人に知ってもらうことが必要となる。
- 入口支援を行い、まずは学習したい活動から入り、徐々にそれに関連した学習すべき活動に移行していくなど、中長期的視点も大切にしながら取組を進めて行く必要がある。

③障がい者や外国人、子ども・若者等多様な人々に対して目を向け、全ての人が共に学ぶことができる環境づくりを進める

- 障がい者や外国人、子ども・若者等、多様な人々の存在に対して目を向けることが重要である。公民館職員は、平素から多様な人々に向け、ニーズ把握を進める努力が必要である。ニーズ把握を丁寧に進めることで、アシスト方法のヒントが出てくる。
- 多様な人々の存在に目を向けると、少数の人だけを対象とした講座等を企画し実施してしまいがちであるが、対象者を限定せず、全ての人が共に参加して学ぶことができる環境づくりを進めることが大切である。

＜子ども・若者、外国人を対象とした取組事例＞

岡山市公民館振興室

○ 岡山市立公民館は、中学校区に1館の公民館を配置し、37の公民館及び21の分館がある。各公民館に館長1名、事業担当者2名（1名は社会教育主事、1名は公民館主事）、夜間事務1名、地域担当職員（市民協働局採用）1名を配置している。また、公民館振興室を設置し、各公民館の活動を支援している。

○ 公民館基本方針を「ともに わたしたちが 未来をつくる 開かれた公民館 ～出会う つながる 学び合う 活躍する～」とし、すべての人に開かれ、地域から世界へと開かれた自由な学び合いにより、多様なつながりが生まれ、社会の問題をわたしたちのこととしてとらえ、学びと実践を繰り返しながら未来へと一步一步進み、一人ひとりの人生を豊かに、そして、持続可能な社会づくりに貢献する公民館を目指している。

○ 取組の重点として、「未来をつくる」を掲げ、共生のまちづくり、地域防災、若者をキーワードに、主催講座の重点を10分野として取組を進めている。



○ 「やさしい日本語」教室

共生のまちづくりの推進に向けた取組。「やさしい日本語」とは何かを理解し、外国人との対話において活用していくようになることを目指す。地域住民と一緒に学び交流することで、誰もが安心して暮らせる地域づくりを目指している。



○ 「チーム灘」(岡山市立灘崎公民館)

次世代への地域活動継承に向けた取組として、中学生・高校生らが、地域や社会課題を知り、主体的に参画する事業や参画の機会を増やしている。灘崎公民館では、「チーム灘」として灘崎中学校区在住の中学生が、自分たちの住んでいる地域の中でボランティア活動を通して、様々な世代の人々と交流し、視野を広げ、多様な考え方を身に付けている。また、高校生になっても引き続き登録してもらい、継続的な活動となるようにしている。



○ 「高島おしゃべりシェア会」(岡山市立高島公民館)

地域の30代・40代の人々が、自分の夢や活動について話し、意見交換をする会。地域の中で知らない人同士が安心して出会う場となっている。この会が基になり新たな活動へと発展している。



-

＜子ども・若者を対象とした取組事例＞

岡山市立西大寺公民館「雄神みんなで学校でごっこ」

- | <div>  神奈川みなで学校ごっこ 時間割 <div>  （令和5年度） </div> </div> | | | |
|---|---|--|---|
| 開校式
種別 | 9:15～ ゆうご家で待っています | | |
| 1時間目
10:15～ | さんごく
① 異文化理解の授業（英語）
② 異文化理解の授業（英語）
③ 異文化理解の授業（英語） | みんなのへや
① 英語の授業
② 英語の授業
③ 英語の授業 | ゆうござつ
① 英語の授業
② 英語の授業
③ 英語の授業 |
| 2時間目
10:45～ | さんごく
① 異文化理解の授業（英語）
② 異文化理解の授業（英語）
③ 異文化理解の授業（英語） | みんなのへや
① 英語の授業
② 英語の授業
③ 英語の授業 | ゆうござつ
① 英語の授業
② 英語の授業
③ 英語の授業 |
| 3時間目
11:45～ | さんごく
① 異文化理解の授業（英語）
② 異文化理解の授業（英語）
③ 異文化理解の授業（英語） | みんなのへや
① 英語の授業
② 英語の授業
③ 英語の授業 | ゆうござつ
① 英語の授業
② 英語の授業
③ 英語の授業 |

- 全戸にセンセイ募集のチラシを配布し、小学生がセンセイの教室が3つ、高校生がセンセイの教室が1つ、大人がセンセイの教室が5教室となり、実施した。
- 参加した子どもたちがさまざまな体験を通じて、多世代の地域の人と交流ができた。また、地域の中に毎年開催しようという意思が芽生えている。



<子ども・若者を対象とした取組事例>

倉敷市福田公民館・公益財団法人水島地域環境再生財団「ゴミ減量化大作戦」

- 倉敷市福田公民館では、日常より、地元中学校や高等学校との連携を進めており、中学校区の小・中学生を対象に人権標語の募集をしたり、高校生と協働した防災学習などを進めたりしていた。
- 公益財団法人 水島地域環境再生財団は、倉敷公害訴訟の和解を踏まえて設立された財団であり、多様な立場の人とつながり、協働できる関係性をつくることを目的に、水島をフィールドに環境学習プロジェクトを進めていた。
- 倉敷市福田公民館が仲介となり、公益財団法人 水島地域環境再生財団と地元中高生をつなぐことにより、福田中学校区「ゴミ減量化大作戦」を実施。スポGOMI選手権大会を実施したり、海ゴミ減量化対策についてのワークショップを開催したり、中高生による川ゴミ・海ゴミ回収交流会を開催した。
- 公民館を中心に、地域の様々な団体を巻き込みながら活動をするすることで、地域の様々な立場の人がつながり、協働する関係性が生まれてきている。



<子ども・若者を対象とした取組事例>

西粟倉村 あわくら会館（公民館類似施設）「やってみん掲示板」「村民講師」

- あわくら会館は、村民が“生きるを楽しむ”ための拠点施設として設置されており、施設のビジョンとして「あつまる、つながる、やってみる。」を掲げている。
- 村民が“生きるを楽しむ”ための活動を主体的に行うため、自由な使い方を創り出せるように、ルールをなるべく設けないようにしており、イベント開催や展示会などいる

いろいろな使い方をできるようにしている。

- また、あわくら会館の職員は、情報のハブ役となることに徹し、村民同士をつなぐ役割を果たしている。

- あわくら会館では、村民の誰もが自由に利用でき、「イベントやります」「一緒にやりませんか」「情報知りませんか」などをテーマに投稿できる「やってみん掲示板」という掲示板を設置し、深いつながりがない村民同士が共通の趣味や興味でつながり、活動を広げることができるようにしている。一緒に音楽を楽しむイベントなどが開催され、若者の公民館の利用につながっている。



- また、村民の仕事や特技、好きなことや趣味を生かした「村民講師」による講座を開催し、村民同士のつながりをつくっている。

- これらの取組を進めることで、若者同士や多世代のつながりづくりを進めている。



＜障がい者を対象とした取組事例＞

ありがとうファーム

- ありがとうファームでは、アートとサービス業の2本柱で活動している事業所であり、「知ることは、障がいを無くす。」のスローガンを合い言葉に様々な活動を実施している。

- 岡山市の公民館と連携し、地域の障害者理解のための活動として、アート展示を行ったり、主催者側となり、巨大すごろくの作成やクッキー作りなどを行ったりした。支援される側ではなく、教える側になるという成功体験が、自分たちから開かれている場所に向いていこうという前向きな考えへの変化へと繋がっている。



- 障害をもつスタッフへのアンケートでは、95%以上の方が現在公民館を利用していない。その主な理由として、「公民館の利用の仕方が分からないから」と回答している。また、「公民館がどのようなところなのか知らせてほしい」「公民館はどんなことをしているところなのかあまり分からないので教えてもらえる機会があれば良い」など、公民館についての情報が届いていないことが分かった。

＜障がい者を対象とした取組事例＞

備前市立西鶴山公民館「岡山県立東備支援学校との交流活動」

- 備前市立西鶴山公民館では、岡山県立東備支援学校との連携を進めている。西鶴山公民館長が岡山県立東備支援学校の学校運営協議会委員となり、公民館と学校が密に連携しながら取組を進めている。
- 公民館が仲介し、岡山県立東備支援学校の学びに地域の方が参画をしている。活動の講師となったり、ボランティアをしたりしており、地域と学校をつないでいる。
- 公民館の文化祭に支援学校が参加したり、清掃実習の活動場所としたり、季節の花の提供を受けたりすることで、公民館を身近に感じてもらうことができるようにしている。高等部では、公民館についての出前授業等も行っている。
- 学校と連携を進め、公民館と関わる機会を増やすことで、その後の公民館での学びへの参加につながるように取り組んでいる。



＜外国人を対象とした取組事例＞

岡山市立京山公民館「フレンドリー京山」

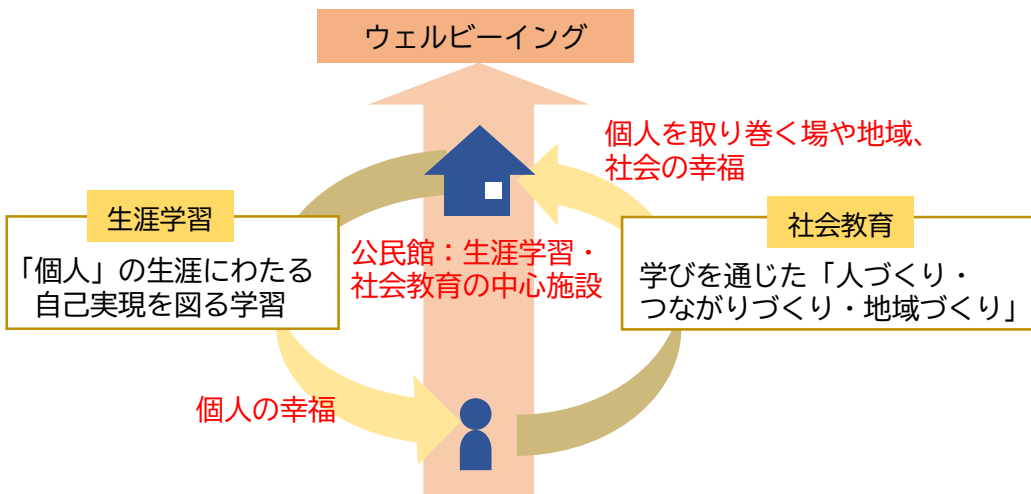
- 京山地区には、地域内に大学が3校あり、留学生等の外国人が多く住んでいる。そこで、2006年から年1回開催している「ESDフェスティバル」の中で、「ワールドカフェ」等、多文化共生イベントを実施していた。
- 「単発のイベントだけではなく、日常的に活動できる場が欲しい」という声を受け、2011年7月に「フレンドリー京山」が誕生した。外国人講師から世界の料理を学ぶ「京山で地球めぐり～世界の料理～」や、地区内の医療機関を掲載した「お医者さん Map」作成、日本の伝統文化や外国の文化を紹介・体験するイベントを企画し実施している。
- イベント等を通して知り合うことで、「知らない外国人」から「顔見知りのお隣さん」となることを目指し活動している。
- その他、「やさしい日本語講座」を令和5年より開催し、参加者の外国人市民からの意見を受け、日本語でおしゃべりする会を2ヶ月に1回開催している。



はじめに

国の「教育振興基本計画」（令和5年閣議決定）、「第11期中央教育審議会 生涯学習分科会における議論の整理」を踏まえ、「全ての人のウェルビーイングを実現するために、障がい者や外国人、子ども・若者、孤独・孤立の状態にある者、高齢者など、誰一人として取り残すことなく、全ての人に、生涯学習・社会教育の学習機会を提供する」公民館の在り方についてとりまとめ。

ウェルビーイング…身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むもの。また、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態にあることを含む包括的な概念。



1 岡山県の公民館をめぐる現状・課題

- ・県内の公民館数・職員数は減少傾向
- ・成人一般対象の学級・講座が多く、青少年対象の事業が少ない。
- ・障がい者を対象とした事業を行っている公民館の割合は約8%。
- ・専任職員がいない公民館も増えている。
- ・全ての人のウェルビーイングを実現していくためには、多様な機関や団体と連携し、公民館を中心としたネットワークを構築していく必要がある。
- ・公民館活動へ子ども・若者や障がい者、外国人など、全ての人の参加を促進することで、公民館の地域コミュニティの拠点としての機能を強化することにつながり、公民館活動の活性化にもつながる。

2 全ての人のウェルビーイングを実現する公民館の取組

1) 全ての人のウェルビーイングを実現するために求められる公民館の環境や体制

①多様な機関や団体とのネットワークづくり

- ・全ての人に公民館の学びを届けるためには、学校や企業、福祉事務所、社会福祉協議会、NPOなど多様な機関や団体とのネットワークを作ることが大切となる。
- ・多様な機関や団体とのネットワークをつくるためには、日常から関係性を構築しておくことが重要である。

②多様な人が利用しやすい環境づくり

- ・施設のユニバーサルデザイン化や、ICT環境の整備、合理的配慮の提供など、全ての人が利用しやすい環境づくりを進めることが大切である。
- ・公民館に関わってもらう機会を意図的に作り、公民館を身近に感じてもらうことで、その後の利用にもつながる。

2) 全ての人のウェルビーイングを実現するために公民館が取組を行う際に意識すべきポイント

①多様な存在の人々に目を向ける

- ・公民館が多様な人々の参加を想定していなければ、参加者側も公民館での学びが視野に入らなくなる。そうすると、障がい者や外国人、子ども・若者等は、ますます公民館の学びに参加せず、公民館側も多様な人々が参加しないことが「当たり前」となる可能性がある。

②個人の要望や社会の要請に応えた取組を行う

- ・個人のスキルアップにつながる活動や、個人の楽しみにつながる活動などの「学習したい活動」を行うことで、生涯学習・社会教育への間口を広げることができる。
- ・一方で、社会から要請され、多くの人が「学習すべき活動」もある。個人の要望と社会の要請のバランスを取りながら、うまく「学習すべき活動」に焦点を当てていく必要がある。

③参加ではなく参画してもらう

- ・ターゲットを明確にして取組みを進めることや、参加してもらうだけでなく、参画してもらう視点が必要。
- ・参画し主体的に関わったり、役割を与えられることで、公民館がその人の居場所となったり、生きがいや喜びを感じることができたりする。

④公民館職員はアシストに徹し、役割を分担する

- ・公民館職員が中心的な役割を果たすのではなく、住民の自立的活動に向けて公民館職員はアシストに徹することが重要である。
- ・これからは公民館職員の意識を変え、内部職員で完結するのではなく、外部の機関等と連携し、役割を分担しながら活動を広げていく必要がある。

求められる方策

1) 公民館を管轄する市町村教委等に求められる方策

①多様な人々が利用しやすい環境づくり

- ・色や宗教にかかわらず使える表示、他言語表記等の環境整備

②目指す方向性や取組テーマ等を設定し、市町村全体で取り組む

- ・市町村教育委員会等が目指す方向性や取組テーマ等を設定し、市町村全体で取り組むことで公民館全体の取組を高めることができる

③各関係機関や学校、NPO、企業等との連携を進める

- ・関係機関や学校、NPO、企業などへ働きかけを行う

④研修体制の構築や職員の配置、ボランティアの募集等の支援を進める

- ・館長等への研修体制の構築、職員の配置、ボランティアの募集等

2) 公民館に求められる方策

①周辺機関や団体、企業等とのつながりづくりを進める

- ・地域にある周辺機関や団体、企業等とのつながりづくり

②きっかけづくり（入口支援）を重点的に行う

- ・まずは公民館に来てもらうきっかけづくりを重点的に進める
- ・入口支援を行い、まずは学習したい活動から入り、徐々にそれに関連した学習すべき活動に移行していくなど、中長期的視点も大切にする

③障がい者や外国人、子ども・若者等多様な人々に対して目を向け、全ての人が共に学ぶことができる環境づくりを進める

- ・多様な人々の存在に対して目を向ける
- ・対象者を限定せず、全ての人が共に参加して学ぶことができる環境づくりを進める